仕立て方・せん定〔基本〕

１．整枝・剪定の時期

せん定による凍害の軽減のため、実施時期に注意しましょう。

（１）冬季せん定

・凍害の発生率を抑えるため１月中旬以降とします。

・１月初旬頃の自発休眠中のせん定は、望ましくありません。

（２）若木せん定

・１０年生未満の若木及び樹勢の強い樹は、２月下旬から３月初旬までに実施しましょう。

２．整枝・剪定の基本

せん孔細菌病の春型枝病斑切除を鑑み、枝量を若干多く残しましょう。ただし、残しすぎて着果が多く、作業遅れ、袋掛け遅れによる、感染時期が長くなるなどの影響で、小玉とならないよう注意しましょう。

（１）日当たり、作業性、薬剤の掛かりを意識しましょう。

（２）樹が混んでいる園は、樹の間隔を通常８～９ｍ×８～９ｍとし、間伐・縮伐を行いましょう。

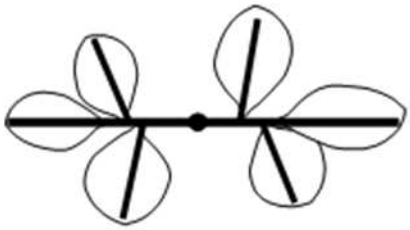
（３）食味の良い果実が収穫できる枝は、短果枝(10 ㎝未満)・中果枝(10～30 ㎝)です。樹勢を適正に保ちましょう。

（４）１本の樹では骨格を作る整枝と、成り枝を整理配置する剪定とを区別し、枝の勢力差（主従関係）をハッキリつけます。

・大枝と中枝を整理し、共枝にしないようにしましょう。

・中・短果枝を作り、残しましょう。

（５）大小いずれの枝も基部と先端を小さくした『葉形』にして品質を揃えます。



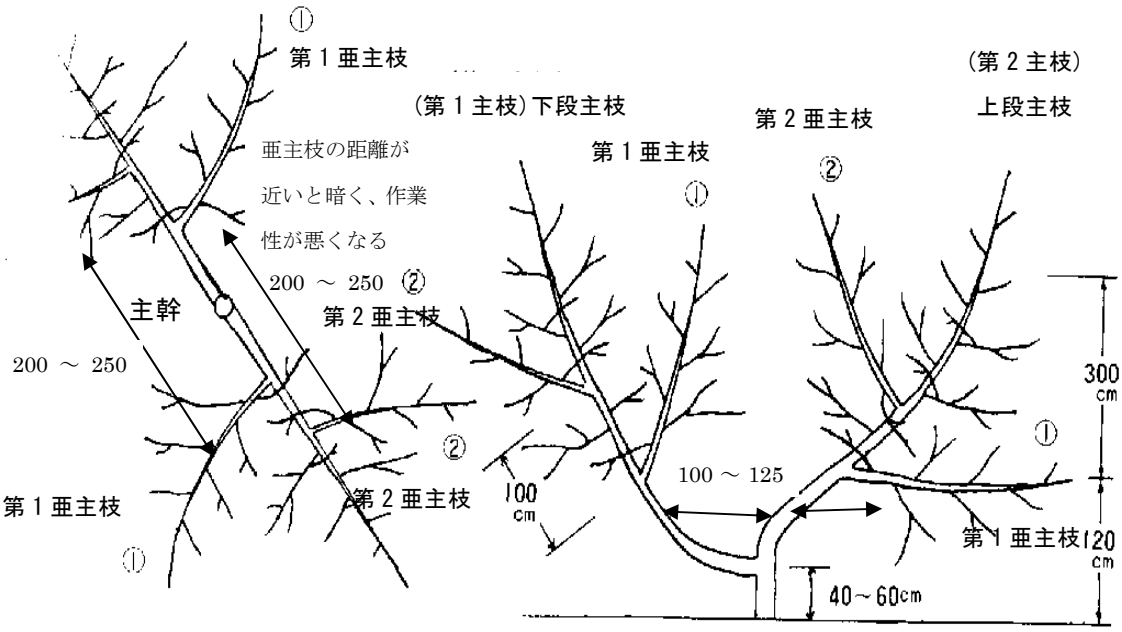
主枝、亜主枝も葉型になるように枝を配置（上から見て）

枝は葉型になるように（模式図）

３　開心自然形（基本樹形）の樹作り

２本主枝を枝が手のひらを広げたような形で、間隔をなるべく均等に配置し、大枝が垂直ではなく斜め45度くらいで広がるようにします。

３本主枝は側枝の扱いが難しいため勧めていません。



開心自然形仕立ての目標樹形

（１）骨格枝の構成

① 主枝の数は２本、亜主枝の数は４本とします。

② １年生苗木を植え付けた場合、基本的には苗木の色が褐色に変わっている位置、地面から 60～70cm 程度の、葉芽があるところで切り返えします。

③ ２年目は、第一主枝は負け枝防止のため主幹の延長枝より、細く発生角度の広い１年遅れの枝、または副梢を選び、地上から４０～６０cm から分岐させます。第二主枝は主幹の延長枝を利用します。主幹の長さが短いほど、旺盛な生育となります。

④ 主枝の斜立角度は５０度前後を維持するが、第一主枝は第二主枝よりもやや広くします。

⑤ ３年目以降は不要な枝を剪除し、支柱等を添えて主枝候補枝の延長を図り主枝を確立します。主枝候補枝は、葉芽を確認し外芽で切り返します。

⑥ 各主枝には、各２本の亜主枝を配置し、１樹に４本を配枝します。

⑦ 樹の拡大に伴って、第二主枝から第一亜主枝をとります。第一亜主枝は地上から 1.2m付近から選び、第二亜主枝は第一亜主枝より１m高めの位置からとります。第二亜主枝は、やや小型に維持しましょう。

⑧ 第一主枝にも同様に、亜主枝をとります。

⑨ 主幹＞第二主枝＞第一主枝、主枝＞第一亜主枝＞第二亜主枝のバランスが崩れないようにしましょう。

⑩ 主枝・亜主枝の先端付近は、小さい枝を密に配置し、先端は外芽で切り返す先刈りをします。

⑪ 添え木・枝吊り・夏季剪定がポイントになります。

⑫ 幼木から若木期までは、主幹(主枝)の添え木を徹底し、春から夏までの新梢管理(芽かき・摘心・剪除・誘引・捻枝等)を月２回程度行います。特に主幹に大

きな切り口ができないように管理します。

※あくまで基本的な考え方であり、地力や樹勢等を考慮し、苗木から若木期までの整枝・剪定が重要です。

参　考

〔用語解説〕

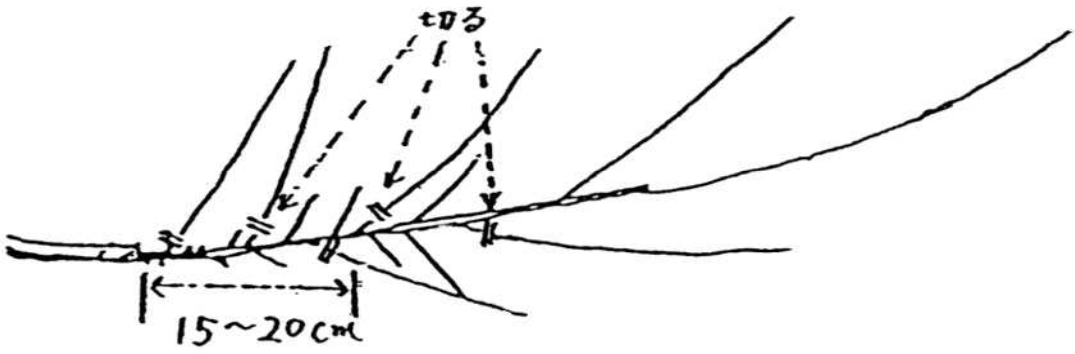
・幼　　木：２～３年生樹
・若　木　期：４～８年生樹
・主　　幹：地上から最上位の主枝の分岐点までの幹の部分
・主　　枝：主幹から直接分かれた枝で、亜主枝・側枝・結果枝（結果母枝）を着ける樹の骨格になる枝
・第 一 主 枝：一番目の主枝
・第 二 主 枝：二番目の主枝
・亜　主　枝：主枝から分岐した枝で側枝・結果枝を着け樹形の骨組みになる枝
・第一亜主枝：一番目の亜主枝
・第二亜主枝：二番目の亜主枝
・主幹延長枝：主幹から伸びた枝
・主枝候補枝：主枝の候補となる枝
・短　果　枝：１０㎝未満
・中　果　枝：１０～３０㎝
・長　果　枝：３０～５０㎝
・成　り　枝：実を成らせる枝
・副　　梢：葉の付け根にできた脇芽
・褐　　色：紺よりもさらに濃い、黒に近い藍色
・葉　　芽：葉になる芽
・外　　芽：外側に向いた芽
・内　　芽：内側に向いた芽
・横　　芽：横側に向いた芽
・切り返えす：枝の先端を切る整枝の作業
・添　え　木：枝が垂れないように添える木
・枝　吊　り:樹の形を成型するために上から枝を吊ること
・春から夏までの新梢管理：芽かき・摘心・剪除・誘引・捻枝等

４　側枝・結果枝の取り扱い

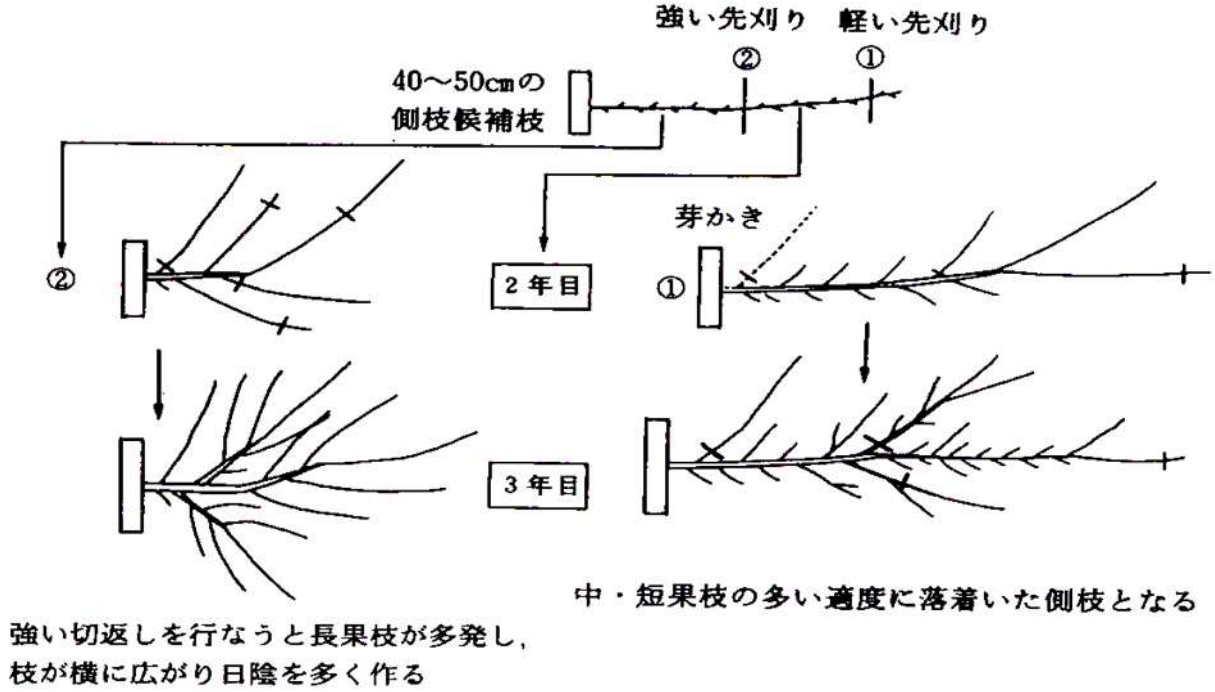
（１）発生角度の狭い枝、太枝を切り取ります。負け枝になるような枝を置かないようにします。

（２）残す結果枝は、直上・直下を取り、やや斜立しているものがよいです。成らして垂らしましょう。

（３）間引くときは基部２～３芽残し、次年度以降の結果枝作りをします。



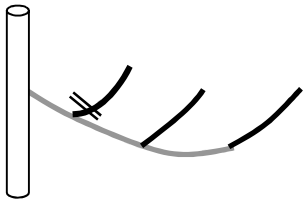
（４）長果枝の先刈りは、通常行わないか、軽くします。



（５）長果枝基部 15～20 cmの上芽は、切り落とすか、次年度摘蕾や早目に芽かきとり、徒長枝にしないようにします。

（６）側枝の維持をする。

パターン①

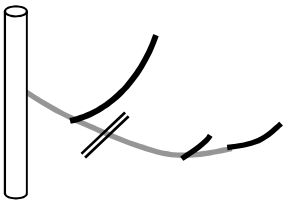


結果枝の先端～基部に強い新梢が発生している

⇩

基部側の新梢を切除する（数芽残す）

パターン②



結果枝の先端が弱り（ハサミの長さより短い）、基部の新梢が強くなっている

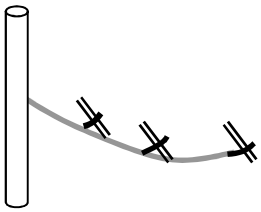
⇩

基部側の新梢まで切り戻す

⇩

なお、枝によってはパターン①と③を併用し、結果部位の長さを保つ。

パターン③



結果枝の先端～基部の新梢が全て弱い。

⇩

原則として全ての中短果枝について、基部にある葉芽まで切り戻す

⇩

基部側の新梢まで切り戻してもよい。いずれにせよ、結果部位が少なくなり、回復しにくい！

（７）川中島白鳳等、下垂しやすい品種の注意点

・先刈り等は内芽か横芽で切り、垂れ下がりを防きます。

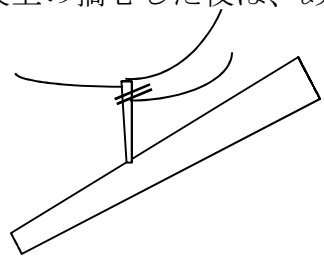
・色の変わった所で切ります。

・親枝が垂れ下がり子枝に負けたら、上向きの強い枝で立て直しを図ります。

５　日焼防止

・主枝、亜主枝の上部等は日焼けを起こしやすいので、適宜小枝を残し日焼け防止を行います。

・主枝、亜主枝上の摘心した枝は、あまり大きくならないよう、小さくしておきます。



６　おいしいももは落ち着いた樹勢で生産される

（１）果実の着色～成熟期に新梢が盛んに伸びている状態では、栄養成長に養分が行き続けてしまい、果実の糖度は上がりにくく、着色も悪くなります。さらに成熟も遅れます。

着色～成熟期の盛んな新梢伸長　→　養分が新梢伸長に取られる

→　果実の糖度低下　→　まずいもも生理落果等熟期の遅れ

7　秋季せん定のねらいとポイント

（1）樹を落ち着かせる

①秋季せん定は、一般的に強樹勢の場合などは、樹を落ち着かせる効果があります。落ち着いた樹では、糖度の高い良質なももが生産できるほか、生理落果の防止となります。

※ 落ち着いた樹勢とは、着色始めには新梢の８５％停止しているものです。

※葉のある枝を切り取ると同化養分の供給が無くなり、樹勢が抑制され細根(秋根)は退化して翌春の生育が落ち着きます。冬季せん定では樹勢の抑制・細根の退化はありません。強樹勢により、受精不良・核割れ・生理落果や糖度不良の品質低下を繰り返すことになります。

（2）効率的な貯蔵養分の蓄積

①もも栽培は、収穫から落葉まで一定期間があり、この間に来年の花芽の充実が図られます。

混んでいると花芽が不充実となるので、光を当て効率的に来年使う花芽を充実させることが必要です。

（3）剪定後の枯れ込み防止

①もも等の核果類は太枝などを切ると傷口の癒合が悪く、そこから枯れ込みが入りやすいです。しかし、秋季はまだ樹液流動があるので、枯れ込みが入り難いです。

（4）その他

①葉があるうちにせん定する秋季せん定は、枝の繁茂状態が良くわかります。

・冬季のせん定よりも、受光体制が良く見えるため、樹形の調整がしやすいです。

②秋季のボルドー散布など薬剤防除効果が高くなります。

（5）注意点

①元々は密植主幹形の樹勢コントロールで導入された技術です。栽植密度が広く適樹勢の場合や、ハダニ等で落葉している場合は実施しないか、徒長枝を切る程度としましょう。

樹勢が弱い樹や、凍害で樹勢が弱い場合は実施しません。

幼木は夏季管理を実施しておくことが重要です。

②冬季せん定だけでは樹勢コントロールが困難な場合に実施しますが、切り過ぎは凍害発生を助長します。

8　秋季せん定の方法

<u>凍害の発生を抑制するため、秋季せん定の程度を控えるましょう。</u>

（1）対象となる主な樹

①主幹形・開心形を問わず、成木で樹勢が強く枝葉の繁茂した樹を中心に行いましょう。

※弱樹勢樹は、もともと枝が少ないため、日当たりがよく、薬液も掛りやすいです。秋季せん定を実施すると、さらなる樹勢低下につながるので行いません。

（２）実施時期

①芽が休眠に入り二次伸長しなくなる９月上旬から中旬までが適期です。

・早すぎると二次伸長となり、遅すぎると傷口の癒合が劣るため、樹勢抑制効果が少ないです。

（３）ポイントと手順

まず、混んでいる所や徒長枝の切り忘れ等を切り、日光を残す枝によく当てます。次に、明らかに来年必要のない太枝・車枝を切除します。３月に切除する予定の枝の基部の枝を切除する程度とします。

① 園全体を見渡し、間伐・縮伐を検討します。樹と樹がぶつかって混んでいたら、残していく樹を決め、順次、間伐を断行して作業性・日照性の良い園地にすることが大前提です。

凍害抑制のため、縮伐は３月に断行します。

② １本、１本の樹の樹幹をみて骨格枝の配置を確認し、間引く太・中枝を決め、その枝の基部側の小枝を、太りを抑制するため切除します。また、樹冠上部で主幹等と競合する大きい側枝も同様にします。

太・中枝自体は、３月に切除します。

③ 次に発生角度の狭い徒長枝を切り取ります。

④ この位のせん定で枝葉の間から主幹が透けて見えるようであれば、後は冬季せん定の１月以降で仕上げをするようにします。

⑤ 結果枝への日当たり具合（最低照度２０％）を確認しながら軽いせん定にとどめます。

緑葉が貯蔵養分を作ることから、切除し過ぎは凍害の発生や過剰な樹勢低下につながります。

（４）注意点

・秋季せん定では切り過ぎに注意しましょう。切り過ぎは凍害発生を助長します。

・徒長枝を中心に切除し、太枝の切除は３月に実施します。

・太枝の太りを抑制するため、徒長枝や基部の枝を切除しておきましょう。

・樹勢コントロールも必要ですが、凍害発生を抑制する事を念頭に置きましょう。

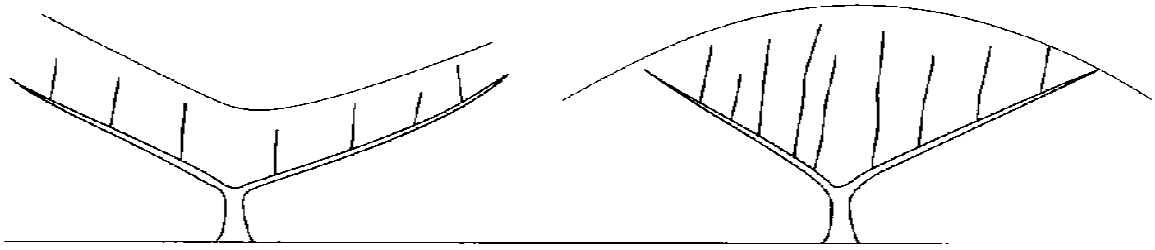
・秋季せん定を実施するときは、必要な樹と必要な部位のみに留めます。

・冬季せん定も年内は凍害の発生率が高まるため１月中旬以降とし、特に６～７年生程度までの若木は、２月下旬以降に実施します。

※自発休眠中のせん定は、望ましくありません。自発休眠打破の目安は、１月１日頃です。

・秋季剪定で鋏せん定は行いません。のこぎりせん定のみとします。

生育のよしあしの判断と秋季せん定の判断



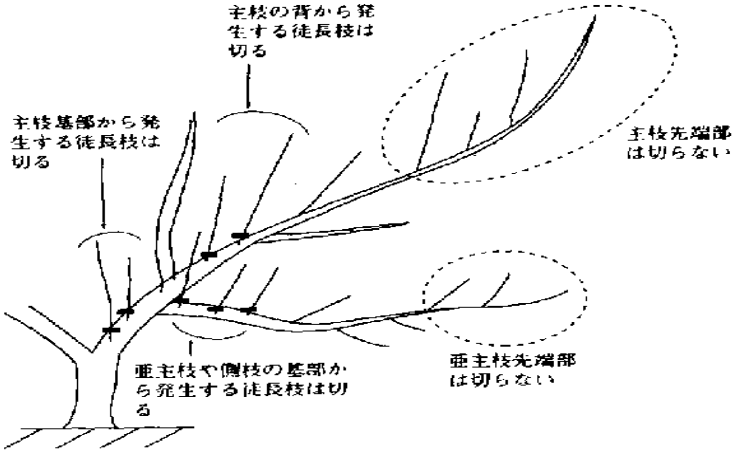
良好な成育の樹

・主枝の角度に合わせて徒長枝がＶ字に分布
・秋季せん定はほとんどしなくてよい

悪い成育の樹

・主枝基部から強い徒長枝が出て、山型になっている。
・主枝を中心に徒長枝せん定する

秋季せん定で切る枝



切り口には塗布剤を塗る！

9　芽接による更新

系統の良いものが各自の園、または地域にあると思われるので、収益性の低い品種・系統は早急に更新を図る。なお、樹齢の若い場合は次の要領で芽接による更新を行う。

（１）接穂は今年４０㎝ぐらい伸びた新梢で、日光が十分当たり充実した新梢を選ぶ。

（２）桃形成層の細胞分裂は９月上中旬が最も活発であり、彼岸までに行う。

（３）方法

① 良く切れるナイフ（カッター）を使う。

② 接芽と台木の形成層(特に基部)を合わせる。

③ 水が入らないようにテープでしっかり巻く。

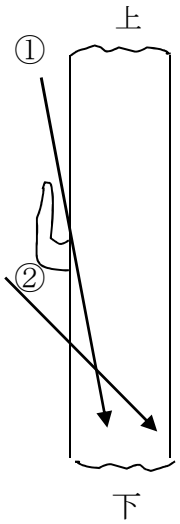
※接木専用のメデールテープ等を使えば芽と葉柄を包む事ができる。また、コスカシバ予防と翌春切らずにおけるので便利である。ビニールテープはくびれる場合があるので翌春カッターで切る。

（４）高接ぎの位置は幹に近い主枝・亜主枝上の１年枝の基部で、南面並びに伸長方向の背面または側面に接ぐ。１樹当たり５～１０個所。

※更新方法には胴接ぎ更新もあるが、休眠期の３月頃に行う。(剪定時の穂木確保が必要)

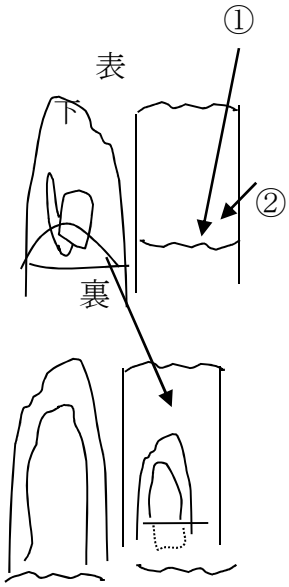
10　そ(削)ぎ芽接の手順

穂　　木



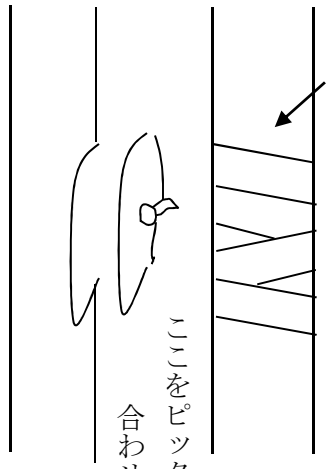
①②の順に上から刃を入れて芽を作る。
裏の木質部は付けたままでよい。

台　　木



①と②の順に刃を入れ芽と同じ形を作る。
②は①よりやや上で切り舌状部を作ると芽は落ちない。

芽をそのまま挿入し結束する。



メデールテープで引っ張りながら巻く。

ここをピッタリ合わせる。